

生きられる経験としてのアートベース・リサーチ
アートパフォーマンス『黒い雨』の事例から

広島市立大学 湯浅正恵

1. 目的

アートパフォーマンス『黒い雨』は、日本平和学会春期大会のプログラムとして、昨年7月に広島で上演された。この作品は、報告者が上関原発計画反核運動や東京電力福島第一原発事故の研究 (Yuasa 2013a; Yuasa 2013b) を通して出会うことになった「黒い雨」未認定被爆者の方々をテーマとし、写真とインタビューを基に創作された作品である。本報告では、制作過程、公演概要、アーティストと観客の感想などを紹介し、企画意図を越えて生成したものを、アートベース・リサーチの意義と可能性の観点から論じる。

2. 方法

分析材料として提示するのは以下の3点である。

①未認定被爆者の方々と10人のアーティスト、そして企画者・プロデューサーである報告者の相互作用としての制作過程、②舞台の概要、③観客とアーティストの感想。

3. 結果/結論

「黒い雨」の未認定被爆者の存在は、「被爆者」主体を構築してきた科学・法・政治言説により、戦後70年の今日まで否定され続けられて来た。この作品は彼・彼女らの人生を、アーティストの身体表現により舞台上で再現し、それを観客とともに承認するという治癒的目的をもって企画された。しかし限られた予算と制作期間により、即興を中心に構成されることになった舞台は、アーティスト自らが東日本大震災を経験することで獲得した身体図式を用いることで、不確実性と複雑性に翻弄される身体を蘇らせ、結果的に原爆の、震災の、さらには「真実」とそれに支えられた私たちの日常の狂気を表現することになった。どれだけの観客がそれらの狂気を感じたかを確認する手段はないが、企画意図を越え出現した、この「生きられる空間」 (Lefebvre 1991) は、少なくともアーティストと企画者の思考を深め、「未来」へ向かう創作や思考を誘うこととなった。

文献

Lefebvre, H. (1991), *The Production of Space*, trans. D. Nicholson-Smith, Oxford: Blackwell.

Yuasa, M. (2013a), 'The Future of August 6th 1945: A case of the "Peaceful Utilization" of Nuclear Energy in Japan', *The Study of Time*, XIV, Leiden: Brill.

Yuasa, M. (2013b), 'Whistle in the Graveyard: Safety Discourse and Hiroshima/Nagasaki Authority in Post-Fukushima Japan' in HCU 3/11 Forum (ed), *Japan's 3/11 Disaster as Seen from Hiroshima: A Multidisciplinary Approach*, Tokyo: Soeisha/Sanseido Shoten.